【論　　文】

ケイパビリティの動態論の構築のための基礎的考察

―― 移民の生活と移住の自由を検討例として ――

玉　手　慎太郎*

要　旨

本稿の目的は，ケイパビリティの通時的変化についての理解を促進するために，ケイパビリティの動態論（capability dynamics）を構築することにある。アマルティア・センによって提起されたケイパビリティ・アプローチは，人々の生活の豊かさをその人のもつ自由の大きさによって把握する試みである。その標準的な理解はあくまでケイパビリティを一時点で把握するものとなっており，通時的変化についての検討は，Matsuyama & Mori（2011）およびMori & Tamate（2014）を嚆矢としつつも，いまだ十分にはなされていない。

ケイパビリティの通時的変化は大枠として以下のように理解される。まず初発時点でのケイパビリティの中から，一つの機能ベクトル，すなわち一つの生き方が選択される。すると，その選択によって当人の有する財や能力，あるいは周囲の環境が変化する。この変化にともない，次の時点のケイパビリティが，それ以前とは異なる形で形成される。以上の過程は何度も繰り返され，時間の経過とともにケイパビリティは継続的に変化していく。

このような変化は，移民の生活を事例として取り上げることで明晰に理解される。選択を通じて徐々により大きな自由を獲得していく移民の生活のあり方には，ケイパビリティの通時的変化が明瞭に現れているからである。さらに，移民の生活の描写をふまえて考えることで，ケイパビリティの通時的変化には3つの複雑性があることを指摘できる。第一に，ケイパビリティの変化は単純な拡大や縮小ではなく，要素ごとに異なる変化をみせる不均一なプロセスでありうること。第二に，ケイパビリティの中から生き方を選択する意思は単一ではなく，意思そのものが変化しうること。第三に，当人の意思がケイパビリティの変化をもたらすのみならず，ケイパビリティの変化が意思を変化させることもありうること。これら3つの複雑性の整理を，本稿はケイパビリティの動態論のひとつの基礎的なフレームワークと位置付ける。

1. 序　　論

本稿の目的は，ケイパビリティの通時的変化についての理論的な理解を促進することを通じて，ケイパビリティ・アプローチを拡張することにある。言い換えれば，ケイパビリティの動態論（capability dynamics）を構築することにある。とはいえ，この遠大な主題について完全な理論モデルの構築をなすものではない。本稿は今後の理論構築のための初発の試論として位置付けられる。

アマルティア・センによって提起されたケイパビリティ・アプローチは，人々の生活の豊かさを，その人の自由の大きさによって把握する

＊　学習院大学法学部教授

視点を提供するものである。ここで自由の大きさとは，その人の有する，生き方についての選択肢の幅を指すものであり，これがケイパビリティと呼ばれる。ケイパビリティに注目することで，私たちは個人の生活の豊かさを，単なる主観的幸福度や財の多寡を超えて，いっそう実質的なものとして理解することができるようになる。

多数の研究によってその理論的貢献はすでに明らかになっている一方，ケイパビリティ・アプローチは理論的に完成されたものではなく，いくつか曖昧な点が残されている。そのうちの一つが，ケイパビリティと時間の関係である。センの本来の意図，すなわち人々の生活の豊かさを捉えるという意図に照らして考えると，人々の生活が継続していくものである以上は，ケイパビリティもまた一定の時間の幅を持って把握されなければならないはずである。しかしケイパビリティ・アプローチの標準的な理解はあくまでケイパビリティを一時点で把握するものとなっており，通時的変化を検討する枠組みはいまだ構築されていない。それゆえここに，ケイパビリティの通時的変化を理論的に把握する，すなわち，ケイパビリティの動態論を構築するという課題が浮上する。

ケイパビリティの通時的変化を扱った先駆的な理論研究として，Matsuyama & Mori（2011）およびMori & Tamate（2014）が挙げられる。しかし両者の関心は個人の福祉あるいはマクロ経済的状況の通時的変化に向けられている。これに対して本稿は，ケイパビリティという自由を行使して選択をなす，個人の主体性をより詳細に描き出すことを目指す。言い換えれば，本稿が取り組むのは個々人のケイパビリティの通時的変化のミクロな描写である。そしてそのような描写をなすための具体的な検討事例として，日本への移民の生活を取り扱う。

以上のように本稿の目的は人々のケイパビリティの変化を記述することにあり，ケイパビリティ・アプローチに基づいた規範的主張をなすことを目的とはしていない。言い換えれば，ケイパビリティの平等，あるいは基礎的ケイパビリティの平等といった正義論に関する問題を直接に取り扱うことはない[1)]。しかしそのことは本稿が規範的な議論に関連性をもたないということを意味しない。ケイパビリティが通時的にどのように変化するのかを把握することは，長期的な視点から正義を実現することの土台となるからである。

本稿は以下のように構成される。まず第2章において，ケイパビリティ・アプローチの理論構造とその意義を確認する。次に第3章において，ケイパビリティの通時的変化についての基本的な考え方を提示するとともに，日本を訪れる移民を例として，ケイパビリティの通時的変化が私たちの生活においてどのような意味で重要な論点となるのかを示す。つづく第4章においては，引き続き移民の事例をもとに，ケイパビリティの通時的変化をめぐる重要な3つの特徴を取り出し，それを元にケイパビリティの動態論の理論的枠組みを示す。さらに第5章においては，ひとつのインプリケーションとして，ケイパビリティの動態論とセンのエージェンシー概念との重要な関連性について論じる。そして第6章においては，これもまたひとつのインプリケーションとして，ケイパビリティの通時的変化という観点と，ケイパビリティ・アプローチの有力な応用例である「意欲－ケイパビリティ」モデルとの関連性について論じる。

2. 背景：ケイパビリティ・アプローチとはいかなるものか

2-1. 機能

はじめにケイパビリティ・アプローチの基本

1） ケイパビリティの平等と基礎的ケイパビリティの平等の相違については玉手（2011）を見よ。

的な理解を確認しよう[2]。ケイパビリティ・アプローチは，経済学と哲学を横断する多くの研究を行ってきたインド出身の経済学者･哲学者，アマルティア・セン（Amartya Sen）によって提唱された理論である。その目的は人々の生活の豊かさをより適切に把握することにあり，センは人々の自由および福祉の指標として「ケイパビリティ」を定式化することによってそれをなした。

ケイパビリティ・アプローチは，「機能（functioning）」と「ケイパビリティ（capability）」の二つの概念を重要な構成要素とする。まず機能とは，ある人の生活の様々な側面を個別に取り出したものであり，人がある状態であることや，ある行為をすることができることとして把握される。たとえば「適切な栄養を得ている」「健康である」「自尊心を持っている」「コミュニティに参加しながら生活している」といった一つ一つが機能である（Sen 1992, p. 39, 邦訳 67 頁）[3]。

ある人の生活の質（生活の良さ）は，私たちが価値を見出すこれらの機能の組み合わせとして把握することができる，とセンは考える。すなわち，適切な栄養を得ていて健康であり，自尊心を持ちながらコミュニティに参加する生活を送っている，というように，人の生活は一連の機能によって多面的に把握されうる。またこの観点から，個々人の生活の良さの比較も可能になる。たとえば，適切な栄養を得ていて健康ではあるが，差別を受けているために，自尊心を傷つけられるとともにコミュニティから排斥されている人は，先に挙げた人よりも生活の質が低いとみなすことができるだろう。

なぜ私たちは機能に注目すべきなのだろうか。生活のあり方（生活の質）を機能の組み合わせによって把握することは，その人の幸福度によって把握したり，所得の大きさによって把握したりするよりも適切である，とセンは主張する。たとえば，上に挙げた二人目の人物（差別を受けている人）は，もしかすると自らの置かれたその状況を諦念によって受け入れているがゆえに，主観的にはそれなりに幸福であるかもしれない[4]。また所得だけを見れば，非常に裕福であるかもしれない。しかし，そのことをもってこの人物の生活の質は高いと判断することは明らかに的外れである。とすると，幸福度や所得の高低によって生活を把握すれば，そこには歪みが生じてしまうことになる。機能による把握は，そのような歪みが生じないように，人が実際にどのような生活を達成しているのかを，多元的な諸要因を縮減せずに記述しようとするものである。

2-2. ケイパビリティ

この機能を基盤として，ケイパビリティが定式化される。ケイパビリティとは，「人が達成することのできる多様な機能（ある状態であることや，何かをすること）の様々な組み合わせ」（Sen 1992, p. 40, 邦訳 68 頁）であり，より正確には「その人が有する，ある種類の生活を送ったり，それとは別の生活を送ったりする自由を反映する，機能ベクトルの集合」である（同）。すなわち，その人が実現しうる生活の可能性，つまりはどのような生活を送ることができるかという意味での自由の大きさのことを，その人のケイパビリティと呼ぶ。センは次のように述べる。「ある人の諸機能の組み合わせがその人が実際に達成したものを反映するのに対して，ケイパビリティ集合は達成するための自由を表す――すなわち，その人が選ぶことのできる代替的な諸機能の組み合わせを表す」（Sen 1999, p. 75, 邦訳 84 頁，傍点は原文イタリック）。

2） 第 2 節の記述は玉手（2022）の第 2 節に加筆と修正を加えたものである。

3） 訳文は原文を確認した上で修正している場合がある。以下同じ。

4） これはヤン･エルスターが「適応的選好形成」として概念化した問題である（Elster 1983）。

センは，ある人の機能を見るだけでなく，ケイパビリティにも目を向ける必要があると述べる。それは，現実に達成された諸機能の組み合わせ（つまりは現実の生活のあり方）ではなく，その人の達成しうる諸機能の組み合わせの幅（つまりは生活のあり方に関する自由）に注目すべきだということだ。なぜそうすべきなのか。その理由は，生活の良さが，まさに自由の大きさによって変わってくるからである。

たとえば，何かしらの仕事に就いている状態は，そうではない状態（失業している状態）よりも望ましいとして，このことは機能のみで問題なく記述できる。しかしこれで話は終わらない。さらに，他にも選択肢があった中でその仕事についている状態は，他に選択肢のない状態である仕事に就いている状態よりも望ましいと言えるだろう。多くの選択肢から選べることは，より望ましい選択をする可能性を高めるし，また選択できるということそのものが生活にとって意義あることだとみなされうるからである（Sen 1999, p.18, 邦訳 17 頁）。このことは機能のみではうまく把握できず，機能を越えてケイパビリティを持ち出すことで初めて適切に論じることができる。このように，ケイパビリティに注目するにあたって，私たちは人々が実際に達成した生活の背景にある経済的・社会的な諸条件にも目を向けるよう促される。

センがはじめにケイパビリティという考え方を提唱したのは，ジョン・ロールズ（John Rawls）に始まる現代正義論の文脈において，私たちはいったいいかなる点において平等であるべきかという問いに答えるためであった（Sen 1980）。その文脈においてセンは，人々は効用において平等であるのでも，財において平等であるのでもなく，ケイパビリティにおいて平等であるべきだと論じた[5]。しかしながらケイパビリティ・アプローチの射程はそのような議論に限定されるものではなく，センは人々の生活の良さを把握する基準それ自体としてもケイパビリティを用いている（Sen 1987a ; 1987b）。ケイパビリティという形で把握された自由の大きさこそ，社会制度や個人のあり方を評価する上で注目すべき焦点である，という理解がセンの主張の核である。

3. 基本的な考え方：ケイパビリティの動態論とはいかなるものか

3-1. 通時的変化の論理構造

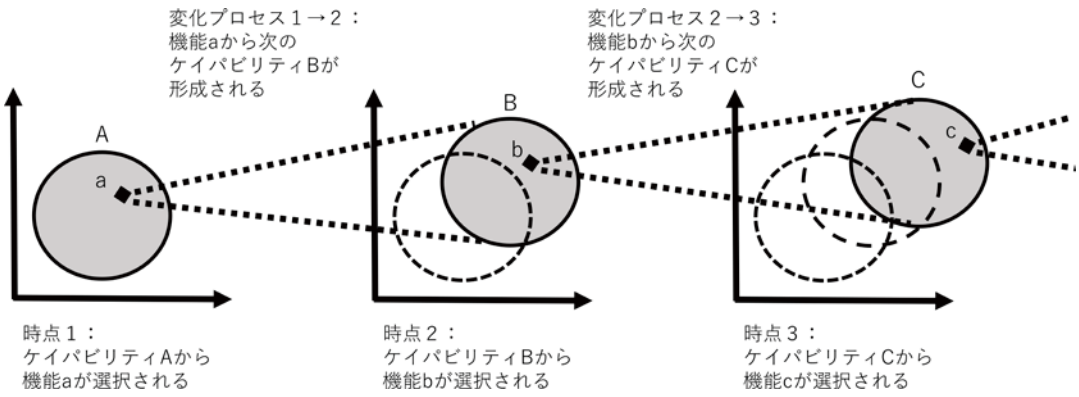
上記のように整理されるケイパビリティ・アプローチは，基本的に一時点に注目するものである。すなわち，ケイパビリティが概念化しているのは，ある個人がある一時点において有する選択肢の幅（選択しうる機能ベクトルの幅）である。しかし言うまでもなく，ケイパビリティが把握しようとしている個人の自由は通時的に変化する。そしてその変化は単純なものではない。

ケイパビリティの通時的変化は大枠として以下のように理解される（Mori & Tamate 2014）。まず初発時点でのケイパビリティの中から，一つの機能ベクトル，すなわち一つの生き方が選択される。すると，その選択によって当人の有する財や能力，あるいは周囲の環境が変化する。この変化にともない，次の時点のケイパビリティが，それ以前とは異なる形で形成される。この過程は何度も繰り返され，時間の経過とともにケイパビリティは変化していく。

個々人の機能は当人が保有する財をどのように利用するかによって決定される。この利用の仕方をセンは「変換（converting）」と呼び（Sen

5） ケイパビリティ・アプローチの正義論の文脈での主張は，分配の単位として何に注目すべきかという問い（すなわち「評価空間」をめぐる問い）に答えるためのものであり，それをどのように分配するべきかという問いについて確定的な主張をなすものではない（Crocker & Robeyns 2010, pp. 65-67）。

図 1：ケイパビリティの通時的変化のプロセス



1985, p.7, 邦訳 23 頁），個人ごとに異なるものであることに注意を促している[6]。セン自身は必ずしも明確に整理していないが，この「変換」のあり方を特徴づける要素は，個人的な要素（身体特性やスキルなど），社会的な要素（社会政策や社会規範，差別など），環境的な要素（気候や立地など）の 3 つの種類に分類できる（Crocker & Robeyns 2010）。ここで重要なことは，3 種類の要素のいずれもが，機能の選択に応じて通時的に変化していくものだということである。具体的に言えば，ある機能の組み合わせを選択する，いわば生き方を選択するとは，特定のスキルを伸ばしたり，新たな仲間たちと人間関係を築いたり，異なる環境へ生活の場を移したりすることを含む。

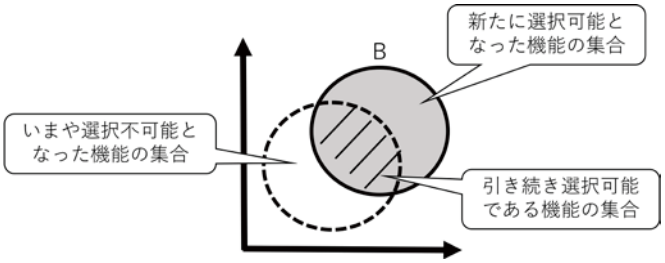
ケイパビリティの通時的変化を，簡略化した形で描いたものが図 1 である。ある時点でのケイパビリティの中から一つの機能が選択され，それによって新たな機能の集合すなわちケイパビリティが形成される，という一連のプロセスは概念的にはこのように把握しうる[7]。加えて，このプロセスにおけるケイパビリティの変化を説明したものが図 2 である。ケイパビリティの変化とは，それまで選択できた機能の一部が選択肢から消失するとともに，それまでは選択できなかった機能が新たに選択肢に含まれる，ということを意味する。そのような変化が起こることは，就職や結婚のようなライフステージの移行を想定するとわかりやすいだろう。

図 1 および図 2 においては，ケイパビリティが大きさはそのままで右上にスライドするような形でケイパビリティの変化を描いているが，もちろん常にそのように変化するわけではな

6） 厳密に言えば，機能は財から直接に引き出されるわけではなく，財がもつ様々な特性から引き出される（Sen 1985）。ただしこの点はケイパビリティの通時的変化を考える上では大きな重要性を持たないため，本稿では省略する。

7） この図には論理的に不正確な点が 2 つある。第一に，機能は多次元のベクトルであるため，その集合であるケイパビリティも二次元（二軸）の空間にはない。第二に，仮に二次元に縮減して考えるとしても，財を利用しないという選択肢が常にある以上，機能はその値が常にゼロでありうるため，ケイパビリティの空間は原点をふくむ扇形になるはずである。ここでは，二次元空間のほうが多次元空間よりも直感的に把握しやすく，また二次元空間においては円形で描くほうがイメージしやすいと考え，正確さを犠牲にして図示した。図 1 および図 2 はあくまで概念的な理解の促進を目的として描かれていることを改めて確認しておきたい。

図 2：ケイパビリティ内の選択肢の変化の例



い。実際にはケイパビリティの大きさ（すなわち選択肢の広さ）それ自体もまた拡大したり縮小したりすることがありうるだろう。さらに言えば，以前の選択肢がまったく損なわれずに拡大することもあるだろうし（図 3），逆に新しい選択肢がまったく得られないまま縮小するということもあっておかしくはない（図 4）。具体例としては，前者は昇進や相続によって生活環境はそのままに所得や資産が急増した場合，後者は大きな怪我や病気をして長期入院しなければならなくなった場合が想定される。

3-2. 通時的変化の実例

ここまでの議論をふまえて，ケイパビリティの通時的変化が重要性を有すると思われる現実の事例を描写しよう。ここで取り上げるのは，移民の生活である。移民はケイパビリティ・アプローチの適用対象として典型的ではないが，以下に見るように，ケイパビリティの通時的変化を描写する上で示唆に富むものである[8)]。

生まれ育った国を離れて日本に移住してきた移民は，少なくともその移住の当初時点では，いくつかの生活上の困難に見舞われると考えられる。日常会話や行政手続きにおける言葉の壁，

図 3：単純拡大のケース

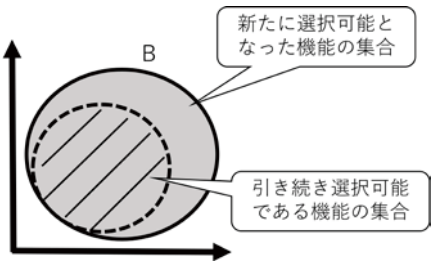
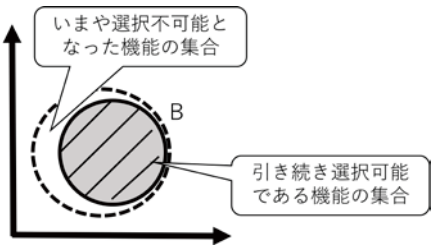


図 4：単純縮小のケース



文化の違いによるトラブルはもちろんのこと，生活環境の変化やストレスによって健康を害することもあれば，待遇の良い仕事がなかなか見つからず貧困状態におかれてしまうかもしれない。これらのことをふまえれば，少なくとも移住当初の一時点のみ観察する限り，移民のケイパビリティは縮小する，すなわち移民の生活の自由は制限され，その生活の質は低下すると考えられる。

しかし，だからといって日本への移住は移民

8） 以下の記述は出身国や地域を特定することなく，日本よりも経済水準の低い国から日本へと移住する，いわゆる移民一世の人々の生活を，一定の理念形として描いている。記述にあたっては永吉（2020）を参考とした。

の生活にとってマイナスだと判断するのはあまりに早計である。移民の生活はずっとそのままではないからである。日本語の習熟や文化への適応，さらに職業上のスキルの習得などにより，移民の生活の質は徐々に向上していくと予想される。一時的なケイパビリティの縮小の先に，ケイパビリティの拡大が生じるという事態を，私たちは容易に想像することができる。

とはいえもちろん，すべての移民が等しくケイパビリティの拡大を経験するわけではない。移民ごとに状況は異なり，ケイパビリティの改善に成功する移民もいれば足踏みする移民もいるだろう。では，その違いは何に由来するのか。その違いが当初のケイパビリティの中で何を選択したか（あるいは選択できたか）に依存すると考えるのは自然なことである。日本語を積極的に学ぶ人もいればそうでない人もいるだろう。移民に好意的かつスキル習得を応援してくれる職場を見つけられる人もいればそうでない人もいるだろう。そういった選択の相違が，獲得されるケイパビリティの変化をもたらす。

以上の記述は，生活の質を向上させることのできる移民とそうでない移民のあいだの差異を理解するためには，ケイパビリティの変化がどのようにして生じるのかに目を向けなければならないということを示唆する。ここにケイパビリティの動態論のひとつの意義を見出すことができる。

4. 理論的精緻化：ケイパビリティの動態論のフレームワーク

4-1. 移民の生活からみえてくる3つの論点

3-2節で論じた移民の生活の例について，もう一歩踏み込んで考えていこう。上記のような形である程度の期間，日本に暮らした移民には，いずれどこかの段階で，日本に居続けるのか，それとも出身国に帰国するのかという大きな選択が生じる[9]。この選択を詳しく見ていくことで，ケイパビリティの動態論の構築のために重要と思われる3つの論点を取り出すことができる。

まず，日本に居続けるか帰国するかの選択は，その後のケイパビリティに大きな相違をもたらすものと考えられる。日本に居続けた際に有することになるケイパビリティと，日本での経験をもって母国に帰った際に有することになるケイパビリティは，大きく異なるものになるだろう。ここで重要なのは，その両者の相違は単純に一方が他方より大きい，あるいは小さいというような形では把握できないということである。おそらくこれら2つのケイパビリティは，ある点では一方が優れているが，別の点については他方が優れている，というようなものとなるだろう。具体的には，日本に居続けた方が医療福祉サービスについてより広いケイパビリティを持つが，母国に帰った方が経済的側面においては（物価が安いなどの理由により）より広いケイパビリティを持つ，といったことがありうるだろう。ケイパビリティの通時的変化は，単純な拡大か縮小かの二択ではない――これが第一の論点である。

そしてまた，この選択はそれまでのケイパビリティの変化の積み重ねの上になされるものと考えられる。すなわち，それまで日本において順調にスキルを積み重ねてきた移民はそのまま日本に居続けるという選択肢を取りやすくなるし，着実とはいかなかった人にはむしろ帰国の選択肢が魅力的なものとなるだろう。ここで私たちはケイパビリティの通時的変化において，単に選択肢の変化のみならず，選択する主体の意思（選好と呼んでも良い）それ自体の変化も考慮しなければならない。ケイパビリティの通時的変化においては，必ずしも一貫した意思の

9） 日本に居続ける法的権利の有無は現実には極めて重要な論点となるが，ここでは論旨に関わらないためひとまず傍に置き，移民当人の意思による選択が可能であると仮定する。

もとにケイパビリティからの選択がなされるわけではない。選択肢だけではなく選択意思もまた変化する――これが第二の論点である。

さらに，そのような選択意思の変化が，ケイパビリティの変化に応じて決定されうるということも，ここで指摘されねばならない。上に見たように，日本に馴染んだ人ほど日本に暮らし続けることは魅力的になるということは，意思に基づいてケイパビリティからの選択がなされるだけでなく，ケイパビリティの大きさや内容がひるがえって意思に影響を及ぼすこともある，ということを意味している。言い換えれば，ある意思のもとにケイパビリティから一つの生き方を選択することで新しいケイパビリティが形成されるだけでなく，続いてそのケイパビリティが意思に影響を及ぼし，意思のあり方を変化させるというフェイズがありうるということである。これは一種のフィードバック・ループが成立していることを意味する[10]。そしてまた，ケイパビリティの選択について経路依存性が生じることも示唆する。ケイパビリティの選択と選択から生じたケイパビリティの間には相互に決定し合う関係が成立する――これが第三の論点である。

4-2. ケイパビリティの動態論の 3 つの複雑性

前節で見た 3 つの論点から，ケイパビリティの通時的変化は以下の 3 つの複雑性を有するものと整理できる。

複雑性（A）ケイパビリティの変化の方向の多様性：ケイパビリティの変化は単純な拡大や縮小ではなく，一部の要素が拡大する一方で別の要素は拡大しない（あるいは縮減する）というように，要素ごとに異なる変化を見せる不均一なプロセスでありうる。

複雑性（B）ケイパビリティをめぐる意思の可変性：ケイパビリティの中から生き方を選択する当人の意思は単一ではなく，意思そのものが時点ごとに変化しうる。言い換えれば，ケイパビリティからの選択は所与の選好にもとづく合理的選択とは異なる。

複雑性（C）ケイパビリティと意思の相互決定性：ケイパビリティの中から生き方を選択する当人の意思がケイパビリティの変化をもたらすのみならず，ケイパビリティの変化が意思を変化させることもありうる。すなわち，意思とケイパビリティのあいだにはフィードバックループが存在しうる。

これら 3 つの複雑性は，それぞれ選択対象，選択意思，相互作用それぞれに関するものだという形で階層化されている。これら 3 つの複雑性のいずれについても，それを見落とすならば私たちはケイパビリティの通時的変化を，過度に単純化した形で把握するという誤りをおかすことになる。

この整理を，ケイパビリティの動態論のひとつのフレームワークと位置付けることができるだろう。

5. インプリケーション 1：エージェンシーとの関連性

ここで再びセン自身の理論に立ち返ろう。上に示したケイパビリティの動態論のフレームワークは，選択主体の意思およびその意思と自

10） 人々の移住への願望と移住を実行する能力の間に複雑な関係があるということは，すでに理論的に指摘されるとともに実証研究もなされている。そのような研究の一つとして Czaika & Vothknecht（2014）を見よ。チャイカらはたとえば，移住の願望をもとに移住が実行されたのち，移住の願望がより大きな期待のゆえに拡大し，さらなる移住が実行される，という現象について論じている。

由との相互関係に言及している（複雑性 B および複雑性 C）。この点について，センの「エージェンシー」概念との関連性がひとつの論点となる。

センは「エージェンシー」という用語を多様な形で用いているが，主たる意味の一つは，人々が自ら目標を決定し実現していくことである。この意味でのエージェンシーは，当人の選択とは独立にその人の暮らし向きの良さが実現されることを意味するウェルビーイングと区別される。エージェンシーが重要性を有するのは，それによって個々人を，自由を行使する主体とみなし尊重する視点が与えられるからである（Sen 1992, ch. 4）。

デイヴィッド・クロッカー（David Crocker）とイングリッド・ロベインス（Ingrid Robeyns）は，このエージェンシーを行使することと十分なケイパビリティを有することの間の相互関係が重要であると指摘した（Crocker & Robeyns 2010）。彼らの議論によれば，十分なケイパビリティがなければ人はエージェンシーを行使することはできないし，またエージェンシーが行使されなければいくらケイパビリティがあっても自由な主体とは言えない。これはケイパビリティの意義を把握する上で心の留めておくべき適切な理解であると考えられる。一方で，複数のまっとうな選択肢が目の前になければ，人は自分の人生を意欲的に計画することなどできない。他方で，複数のまっとうな選択肢があったとしても，当人が（自尊心を欠くといった理由で[11]）自身の目標を尊重できなければ，それらの選択肢は有効に利用され得ない。初めからすべての人が十分なエージェンシーを有しており，それが適宜行使されていくというわけではない。

逆に言えば，複数のまっとうな選択肢があることで人々の選択主体としての意思が育まれ，それによってさらに新たな選択肢が探究されていく，という好循環があれば，エージェンシーとケイパビリティは共に発展していくということである。おそらくはこれがセンの理想としたあり方である[12]。そして，そのような理解はケイパビリティの通時的変化という視点の重要性をあらためて確認させるものである。

以上の議論から，ケイパビリティの通時的変化，すなわちケイパビリティが機能の選択を通じて変化していくプロセスは，個々人のエージェンシーがどのように形作られまた行使されていくのかをめぐるプロセスでもある，ということが見て取れる。この理解は，私たちのエージェンシーについての理論的把握をさらに一歩，前に進めるものであるだろう。

6. インプリケーション 2：移民をめぐる政治理論との関連性

以上の議論が実践的な射程をもつのかどうかを見定めるために，ここで三たび，移民の生活の把握という問題に目を向けてみよう。実は，移民研究にケイパビリティ・アプローチを応用する試みはすでにいくつかある。それらの中でも代表的なものが，ハイン・デハース（Hein de Haas）によって移民の行動を説明する記述的モデルとして提起された「意欲－ケイパビリティ」モデル（aspiration-capability model）である（de Haas 2021）。デハースは，移民の行動を当人の合理的選択によって説明する機能主義理論と，社会構造によって説明する歴史的・構造的理論のいずれも，移民の主体性を適切に

11） 自尊心が十分に保たれていないと自由や権利があってもそれを行使することができない，という指摘はジョン・ロールズによってなされたものでもある。この点については玉手(2024)の第 4 章をみよ。

12） たとえば途上国の女性が自由な主体となることの重要性についてセンが論じる際に，このような循環関係が念頭に置かれているように思われる。Sen（1999）の第 8 章をみよ。

把握できていないとし，それらに代わるものとして上述のモデルを提起した[13]。

このモデルにおいては，移民の行動は移住したいという願望と移住できるという自由，つまりケイパビリティによって説明される。すなわち，移民自身が移住したいと思っており，かつそのためのケイパビリティがある場合には移住が実行されるが，そうではない場合，たとえば移住の意思がない場合や移住するためのケイパビリティが非常に小さい場合，あるいはその両方が成立している場合には移住はなされない，と理解する。このモデルの意義は，移住したいと思っている人がみな移住できるわけではないという事実，そして移住できる人がみな移住したいと思ってそれを実行に移すわけではないという事実をうまく説明することが可能になり，移民の行動の多様な実態をより現実に即した形で把握できるようになる点にあるとされる。

このモデルは，ケイパビリティの通時的変化をふまえることによっていっそう現実に則したものになると思われる。というのも移民の「意欲」（すなわち意思）も「ケイパビリティ」も，それぞれ固定的ではなく，時間の経過に伴って変化していくと考えられるからである。

さらに重要なのは，本稿で示した動態論のフレームワークにある，意思とケイパビリティは相互に決定し合う関係にある，という理解である。この理解は「意欲－ケイパビリティ」モデルをより精緻なものとするだろう。ある時点で移住する選択肢はもたないけれど移住を望んでいる人は，移住する選択肢を獲得しようと努力し，そしてその努力が身を結んでいくほどに移住する意思をさらに強めていくかもしれない。反対に，移住する選択肢はあっても移住を望んでいない人は，移住する選択肢よりもそのままの場所に暮らす上で役に立つ選択肢を優先し，それゆえに移住する意思をさらに弱めるかもしれない。

さらに外的な要因が関わってくることも指摘しておこう。たとえば，ある時点で移住する選択肢も移住する意思もあり，実際に移住しようとしていた人が，外的な要因（たとえば政治制度の変化や災害など）によって移住する選択肢が縮減したことを受けて，移住する意思を弱めてしまうことはありうる。具体的に言えば，新型コロナウイルスのパンデミックによって海外渡航が不可能になったことで留学を諦めた人のうちには，パンデミックが落ち着いて留学が可能となったのちにも，もはや留学しようとは思わなかった人がいるだろう。これとは逆に，選択肢が拡大したことで移住する意思が強まることもあると考えられる。それまで留学など考えていなかった学生が，成績優秀者向けの留学支援制度の対象者に選ばれたとき，はじめて留学する意思を持ち始める，ということはおそらく珍しい話ではない。

通時的な変化を把握することで，「意欲－ケイパビリティ」モデルにおける移民の行動の記述はいっそう繊細かつ現実に即したものになると期待される。このことは，ケイパビリティの動態論が，決してケイパビリティ・アプローチの理論的精緻化にとどまらない射程をもつことを示している[14]。

13） このモデルは移住への願望と移住の実行可能性（ability）の組み合わせによって移民の行動の実態を理解する「願望／実行可能性モデル」を発展させたものである。後者のモデルについての研究の一例として Carling & Schewel（2018）を見よ。

14） de Haas（2021）のほかにも，ケイパビリティの概念を移民の政治理論に持ち込むことが有意義だと論じる研究はいくつかある（Kronid 2008, Gasper & Truong 2010, Bonfanti 2014, Juran 2016, Eichsteller 2021）。しかしそれらはいずれも，人々の移住の可能性をケイパビリティとして捉えることの意義を論じるものであり，移住によってもたらされるケイパビリティの変化を論じてはいない。

7. 結　　語

本稿はここまで，ケイパビリティ・アプローチの通時的変化についての理解を促進することを目的として，次のような議論を行なった。はじめに，ケイパビリティ・アプローチの標準的理解においてケイパビリティはある一時点の指標であるが，人々の生活の豊かさを把握するという目的のためには通時的な変化を把握する必要があることを確認した。その上で，移民のケイパビリティを実例として，その要点を3つの複雑性に整理した。すなわち，ケイパビリティの通時的変化においては，第一にその変化が単線的ではなく不均一でありうること，第二にその変化を方向づける個人の意思それ自体もまた時間を通じて変化しうること，第三にこれら二つの変化は相互に影響し合い，フィードバックループを形成しうること，以上3点である。この整理によって本稿は，ケイパビリティの動態論の構築という最終目標へむけた，初発の一歩を形成しえたものと筆者は考える。

今後さらに取り組むべき課題は以下のように見通される。まず，本稿の議論はケイパビリティの通時的変化にともなう複雑性を指摘しただけであり，それらの論理構造の精緻な把握にはいたっていない。それゆえ一つ目の課題として，3つの複雑性を含み入れた理論モデルの構築が求められる（理論の精緻化）。加えて，ケイパビリティの通時的変化という視点から移民の生活を記述することが二つ目の課題となる（ミクロレベルでの記述）。というのも，ケイパビリティの通時的変化の例として取り上げた移民の生活は，ケイパビリティの動態論の有効性を考察する上での絶好の試金石であると考えられるからである。最後に，ケイパビリティの通時的変化という視点から，私たちの社会に暮らす移民，さらには様々な人々の現実のケイパビリティを計測・評価することが第三の課題となる（マクロレベルでの計測）。それによって，ケイパビリティ・アプローチを人々の生活の質の評価に用いるというセン本来の目標は，高い水準で達成されることになるだろうと期待できる。

以上のような課題に取り組むケイパビリティの動態論が，かなりの程度まで理論的に錯綜したものとなることは認めざるを得ない。そもそもケイパビリティ・アプローチ自体が多次元ベクトルの空間という複雑性を有するにもかかわらず，さらにその継続的な変化を捉えようとしているからである。

しかし理論の複雑性の問題は，センがケイパビリティ・アプローチを提唱する中で常に向き合ってきた問題でもある。センはケイパビリティについて論じる中で次のように問いかけたことがある。「なぜ私たちは，厳密なやり方で間違っているほうが良いとし，漠然と正しくあるのを拒否しなければならないのだろうか？」（Sen 1987b, p. 34, 邦訳 62–63 頁）。この問いかけが表現しているのは，複雑な事態を単純化して理解することへの警鐘であろう。人々の生活の豊かさを単に効用や所得で把握することが，たとえ理論的に簡明ではあってもいかに誤った理解をもたらすものであるか，それこそがケイパビリティ・アプローチの初発の問題関心であった[15)]。これと同様に，もしケイパビリティを一時点でのみ評価することが正確な理解を妨げうるものであるならば，たとえ理論的な明快さは期待できないとしても，ケイパビリティの動態論が私たちには必要なのである。

付　　記

本稿は JSPS 科研費（基盤研究 C，課題番号：26K04723）による研究成果の一部である。

（2026 年 7 月 6 日受理）

15）ケイパビリティ・アプローチにとどまらず，センの多様な議論が複雑な現実の理論的な単純化を批判する態度において一貫していることについて，玉手（2021）で論じた。

参考文献

Bonfanti, S. 2014. “Towards a Migrant-Centred Perspective on International Migration : The Contribution of Amartya Sen’s Capability Approach”, *Social Work & Society*, 12(2) : 1-13.

Carling, J. & K. Schewel. 2018. “Revisiting Aspiration and Ability in International Migration”, *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 44(6) : 945-963.

Crocker, D. A. & I. Robeyns. 2010. “Capability and Agency”, C. W. Morris (ed.) *Amartya Sen*, Cambridge University Press : 60-90.

Czaika, M. & M. Vothknecht. 2014. “Migration and Aspirations : Are Migrants Trapped on a Hedonic Treadmill”, *IZA Journal of Migration*, 3, article number 1 : 1-21.

de Haas, Hein. 2021. “A Theory of Migration : The Aspirations-Capabilities Framework”, *Comparative Migration Studies*, 9, article number 8 : 1-35.

Eichsteller, M. 2021. “Migration as a Capability : Discussing Sen’s Capability Approach in the Context of International Migration”, *Social Inclusion*, 9(1) : 174-181.

Elster, J. 1983. *Sour Grapes : Studies in the Subversion of Rationality*, Cambridge : Cambridge University Press. 玉手慎太郎（訳）『酸っぱい葡萄 : 合理性の転覆について』勁草書房 2018.

Gasper, D. & T.-D. Truong. 2010. “Movements of the ‘We’ : International and Transnational Migration and the Capabilities Approach”, *Journal of Human Development and Capabilities*, 11(2) : 339-357.

Juran, S. 2016. “International migration seen through the lens of Amartya Sen’s capability approach”, *Migration Policy Practice*, 6(2) : 24-27.

Kronlid, D. 2008. “Mobility as Capability”, T. P. Uteng & T. Cresswell (eds.) *Gendered Mobilities*, Burlington : Ashgate : 15-33.

Matsuyama, J. & K. Mori. 2011. “Freedom and achievement of well-being and adaptive dynamics of capabilities”, *Metroeconomica*, 62(3) : 494-511.

Mori, K. & S. Tamate. 2014. “Pasinetti after Sen : Towards a Capability Approach to Structural Dynamics of Consumption”, *Metroeconomica*, 65(4) : 690-716.

Sen, A. 1980. “Equality of What?” in S. Mcmurrin, ed., The Tanner Lectures on Human Values, Volume I, Cambridge : Cambridge University Press. And reprinted in A. Sen. *Choice, Welfare and Measurement*, Cambridge, MA : Harvard University Press, 1982 : 353-369. 大庭健・川本隆史（訳）『合理的な愚か者 : 経済学＝倫理学的探求』勁草書房 1989 所収「何の平等か？」

Sen, A. 1985. *Commodities and Capabilities*, Amsterdam : North-Holland. 鈴村興太郎（訳）『福祉の経済学 : 財と潜在能力』岩波書店 1988.

Sen, A. 1987a. “The Standard of Living : Lecture I, Concepts and Critiques”, A. Sen, J. Muellbauer, R. Kanbur, K. Hart and B. Williams. 1985. *The Standard of Living*, edited by G. Hawthorn, Cambridge : Cambridge University Press : 1-19. 玉手慎太郎・児島博紀（訳）『生活の豊かさをどう捉えるか : 生活水準をめぐる経済学と哲学の対話』晃洋書房 2021 所収「レクチャー 1 : 概念と批判」

Sen, A. 1987b. “The Standard of Living : Lecture II, Lives and Capabilities”, A. Sen, J. Muellbauer, R. Kanbur, K. Hart and B. Williams. 1985. *The Standard of Living*, edited by G. Hawthorn, Cambridge : Cambridge University Press : 20-38. 玉手慎太郎・児島博紀（訳）『生活の豊かさをどう捉えるか : 生活水準をめぐる経済学と哲学の対話』晃洋書房 2021 所収「レクチャー 2 : 生活とケイパビリティ」

Sen, A. 1992. *Inequality Reexamined*, Cambridge, MA : Harvard University Press. 池本幸生・野上裕生・佐藤仁（訳）『不平等の再検討 : 潜在能力と自由』岩波現代文庫 2018

Sen, A. 1999. *Development as Freedom*, New York : Alfred A. Knopf. 石塚雅彦（訳）『自由と経済開発』日本経済新聞社 2000

玉手慎太郎. 2011.「「基礎的ケイパビリティの平等」の定式化とその含意 : センの規範理論の明確化のための一論考」『理論と方法』26(2) : 339-354.

玉手慎太郎. 2021.「訳者解説 生活水準をめぐる哲学と経済学 : 現実を見据えて視野を広げる」アマルティア・センほか（著），玉手慎太郎・児島博紀（訳）『生活の豊かさをどう捉えるか : 生活水準をめぐる経済学と哲学の対話』晃洋書房 : 187-200.

玉手慎太郎. 2022.「新型コロナウイルス感染拡大

の防止と「自由」は対立するのか？：ケイパビリティ・アプローチを用いて考える」『学習院大学 法学会雑誌』57(2)：123-143.
玉手慎太郎．2024．『ジョン・ロールズ：誰もが「生きづらくない社会」へ』講談社現代新書
永吉希久子．2020．『移民と日本社会：データで読み解く実態と将来像』中公新書．

Towards a Theory of Capability Dynamics : Preliminary Reflections through the Illustrative Example of Migrants' Lives and the Freedom to Migrate

Abstract

The purpose of this paper is to advance a theoretical understanding of the diachronic change of the capability. In other words, this paper aims to develop a theory of "capability dynamics". The capability approach, originally proposed by Amartya Sen, evaluates the quality of people's lives in terms of the extent of their freedom. The standard interpretation of the approach conceptualizes capability only at a single point in time, and no theoretical framework has yet been established for analyzing its diachronic transformation.

The diachronic change of capability can be understood clearly through the example of migrants' lives. Drawing on the account of migrants' lives, this paper identifies three forms of complexity inherent in the diachronic change of capability. First, changes in capability may take the form of uneven processes of development involving expansion and contraction in different dimensions. Second, the agency through which individuals choose a way of living from their capability set may itself change over time. Third, the very agency that guides such choices may be transformed in response to changes in capability. This paper proposes that clarifying these three forms of complexity provides a foundational framework for a theory of capability dynamics.